

## 六 心意気を示した唐津藩の人々

### —無言の一揆と曳山囃子—

鏡山かがみやまに登ると、唐津湾わんに沿って弧状こじょうに伸びている虹の松原が見えます。虹の松原は、日本三大松原の一つで、鶴が翼つばさを広げたような美しさは全国的にも有名です。その虹の松原よりも少し西の方に、唐津城が見えます。さて、この唐津地方は、どんな大名が治めていたのでしょうか。

次のページの六つの家紋かもんを見ると、唐津藩を治めた各氏は、数十年で転封てんぷうしていたことがわかります。つまり、転勤てんきんが激はげしかったといえます。豊臣秀吉のころから明治維新めいじいしんまでの約三百年間を、継続けいぞくして鍋島氏なべしまが治めた佐賀藩とは対照たいしょう的です。鍋島氏は石高こくだかでは大きな大名でしたが、外様大名＊とぎさまだったので幕府ぼくふの要職ようしよくに就くことはありませんでした。これに対して、唐津は小さな藩でしたが、老中＊らうちゆうなど幕府の要職けいけんを経験けんした大名もいました。一六四九年（慶安二）から唐津を治めた大久保氏おおくぼ以降の各氏は、譜代大名＊ふだいだったからです。唐津から浜松はままつへ転封して、後に天保てんぽうの改革かいかくを行った水野忠邦＊みずのただくには教科書にも登場します。

そのような唐津藩の基礎きそを築いたのは、初代藩主の寺沢広高てらさわひろたかです。寺沢氏は、織田信長だのぶながと豊臣秀吉とよとみひでよしに仕えましたが、関ヶ原せきがはらの戦いでは徳川家康とくがわいえやすに味方あまくさしました。その手柄てがらにより、天草あまくさ（熊本県）の四万石を加増され、一二万三千石の大名となりま



鏡山から見た虹の松原（唐津市・浜玉町）  
現在も防風・防砂林としての役目をはたしている。

した。広高は、地域の人々の協力も得て、虹の松原の植林以外にも、新田開発や松浦川の改修、城下町の建設に努め、名君と称されました。

ところが、広高も苦勞したことがありました。広高が豊臣秀吉から与えられた唐津地方は、波多氏や草野氏の領地だったところす。領内には、主人を失った家臣たちが残っていました。秀吉とその家臣であった広高を憎む者もいたでしょう。そこで広高は、波多氏などの旧家臣の中から庄屋を任命し、不満を和らげようとしました。庄屋には、武士と同じように苗字帯刀が認められ、乗馬も許されました。また、税も一部が免除されました。したがって、唐津藩内の庄屋たちは、プライドが高かったのです。

一六三七年、天草・島原の乱が起こりました。その責任で、唐津藩領だった天草四万石は幕府から没収されてしまいました。二代目の寺沢堅高は、このことを大変悔やみ、後に自殺したと伝えられています。唐津藩領は一年間天領となった後、大久保氏が治めるようになりました。

数十年で大名が交代した唐津藩では、大名と農民や町人とのつながりが弱かったようです。そればかりか、転封のたびごとに、その費用を負担させられた領民たちは、圧政に対して反抗心を強くしていったようです。圧政に対する行動の代表例として、一七七一年七月に起きた虹の松原一揆があります。

四代目の土井氏に代わって唐津藩主となった水野忠任は、藩の財政改革を積極的に進めました。この改革によって、寺沢氏以来、課税の



初代 寺沢氏  
1595年～1648年



佐倉城（千葉県）から  
三代 松平氏  
島羽城（三重県）へ  
1678年～1691年



岡崎城（愛知県）から  
五代 水野氏  
浜松城（静岡県）へ  
1762年～1817年



明石城（兵庫県）から  
二代 大久保氏  
佐倉城（千葉県）へ  
1649年～1678年



島羽城（三重県）から  
四代 土井氏  
吉河城（茨城県）へ  
1691年～1762年



棚倉城（福島県）から  
六代 小笠原氏  
1817年～1871年

唐津藩を治めた各氏の家紋



富田才治の碑（浜玉町平原）  
右奥に見えるのは平原小学校

対象から免除されてきたものにも税が掛けられるようになりました。増税によつて、農民の暮らしは、さらに苦しくなったのです。

この一揆の指導者は、平原村（浜玉町）の大庄屋、富田才治でした。

才治は、これまで認められてきた帯刀が水野忠任によつて禁止され、大庄屋としての誇りを傷つけられていました。また、平原村の庄屋は一度も転勤したことがなかったので、他の村と比べて、庄屋と農民の結び付きが強かったという背景もありました。

才治は、一揆の計画が藩に漏れないように、注意深く準備を進めました。一七五四年、久留米藩（福岡県）で起きた大規模な一揆では、農民たちの要求を藩が受け入れる約束をしましたが、一揆がおさまると厳しい取り調べが行われ、多くの犠牲者が出たことを才治は知っていたからです。犠牲者を出さずに、藩に要求を受け入れさせるためには、どうすればよいかを考えました。武力を用いて失敗に終わった久留米一揆の例を踏まえて、才治は、非暴力・不服従の作戦をとることにしました。彼は、若いころ私塾で儒学を学び、その経験を生かして平原村に塾を開いていました。学者でもあった才治ならではの作戦でした。

七月二十日、野営の準備をした農民数千人が虹の松原に集合しました。二、三日様子を見ていた入野・切木（肥前町）、有浦（玄海町）、名護屋・打上（鎮西町）の村々からも農民が集まってきました。さらに、唐津湾や玄界灘に面した漁村からも漁師たちが船で虹の松原へやってきました。一揆勢は二万五千人ほどに達しました。これは、当時の人口の三分の一にあたります。



唐津藩の役人や庄屋が虹の松原に駆けつけると、一揆勢は天領側（浜玉町方面）に退き、無言で要求書を突きつけました。要求書には、川べりの土地には課税しないこと、検査のためといって余計に米を取らないこと、楮を藩が高く買うこと、干鰯や鮪にかかる税をなくすことなどが書かれていました。最初は強い態度をとっていた藩側も、長期化して幕府から責任を問われるのを恐れ、ついに要求を受け入れました。しかし、後に、富田才治ら四名は一揆の首謀者として処刑されました。これが、虹の松原一揆です。

また、町人が力を示した例としては、唐津供日があります。江戸で化政文化が栄えたころ、唐津では一八一九年（文政二）に刀町の赤獅子が製作されました。以後、明治九年までに合わせて十五台の曳山が作られ、唐津神社の秋祭りである唐津供日の時に城下町を巡行するようになりました。旧暦の九月二十九日の供日だけは、城内三の丸にある唐津神社への通行が町人にも認められました。唐津の曳山は、漆の一閑張りという工法で作られています。一台の曳山を作るには、今のお金で約一億五千万円かかりました。それだけの財力が町人にあったことを示しています。質素儉約が命じられていた時代でしたが、現代と同様、料理や衣装にはお金をかけていたようです。

唐津藩は、明治維新では、それまで譜代大名が治めていたため、苦しい立場に置かれました。しかし、人々の心意気を示す曳山行事は、「エンヤー、エンヤー」の掛け声と共に今も受け継がれています。

唐津神祭行列図（唐津神社蔵）  
生活費の3カ月分を料理などに費やしたことから「三月倒れ」という言葉が残っている。

